



機関紙

一水会

No.10
『夏号』

発行日/2018年5月1日

発行人/小川 游

編集責任者/さきやあきら

発行/一水会事務局

〒192-0364

東京都八王子市

南大沢2-224-3-502

玉虫良次方

Tel.042(674)6922

<http://www.issuikai.org/>

題字/有島 生馬

80回記念展・企画について

事務局長 玉虫良次



昨今の科学技術の発達には目

覚ましいものがあり、人が描いたように見えるコンピュータ・ソフトも開発され、すべてに焦点が合うデジタルカメラなどの機能により、写した画像がそっくりに描ける技術もあるようです。

デッサンによる実体・質感・空間の把握がなくても、表面上の処理として作品を完成できるという事でしょう。それはそれである分野の美術の目的には合ったものでしょうが、日本の洋画史を見てきた者からすると首を傾げたくなる時があります。

また、インターネットなどの情報検索の中には限界があり、ある一定の画家たちの作品は画

像を通して頻繁に目に触れるの

に対して、少し前の時期に素晴らしい作品を残し、後の人たちにも多くの影響を与えた画家であっても、制作活動が限られた地域であるなどの理由から、見られる機会が少なくなってしまう画家もいます。この事は、ある面では今ほど情報の多くなかったアナログ時代よりも不自由なことに陥っていると思えてなりません。

第79回一水会展では、初出品の方たちの作品応募も大幅に増え、とても嬉しく思います。ただ、描く技術を重視するあまりか、巧いのだが個性が弱く、同じように見える作品も増えてき

たように感じます。このことは、近年のデジタル技術の発達による画像処理の容易さにも関係があるのかもしれない。

一水会80年の歴史の中には、

自己の制作と真摯に向き合い、深い精神性に貫かれた作品を遺した多くの画家がいます。一生をかけてテーマを見つけ、自己の方法論で独自の画法を絞り出した画家達です。その画家の

作品を改めて目にする事で、画家の制作に取り組む姿勢や歩んだ多くの時間を感じていただき、制作の楽しさ、多様さ、個性とは何かなど、絵をより深く味わって頂けたらと思います。それは先人の仕事の中に独自の

作家性を見出すこと、描く側にとつては長く制作し続けることに繋がります。人が時間をかけて積み上げてきた制作過程の重みは、実作を生目の目で見る時の、受け止める側の感覚の重みと同じはずです。

80回記念展の特別陳列の企画を通して、パソコンなどのモニター画面やプリントでは分からない、実物の絵肌を前にして初めてわかる制作過程の奥深さを感じ至つてもらえれば何よりです。特別陳列の画家については、当時彼らの身近にいた一水会のメンバーから、紹介文やギャラリートークで説明していただく予定です。ご期待ください。

第80回記念一水会展出品の注意
出品申込書・出品票はコンピュータで処理をしますので、必ず「第80回記念展用」を使用して下さい。



木村 毅 画

小諸一水会展

廣畑 正剛、中澤 嘉文、
小沼 秀夫、金井美智子、
黒鳥 正己、松澤 泉次、
若林 邦宏の各氏が出品。

[会期]4月14日(土)~6月3日(日)

9時~17時(月曜休館、月曜が祝日の場合、翌日休館)

[会場]小諸高原美術館・白鳥映雪館

小諸市大字菱平

入館料:500円(一般の方)

談

代表
小川游先生

展を前にして



小川 玉虫君、きみの初出品は40回展からだった？ 僕のほうはハッキリしてるよ、30回展から。
玉虫 昨日も探したんですけど、全然わかんなくて。42回か43回か？（玉虫氏は40回展から出品）
小川 どんな絵だったかな？
玉虫 最初ね、静物画二点だったです。受付時間に遅れて持っていた

って高田先生に、「お前は！」とか言われて。
小川 あゝあ！ 高田先生が僕にね、「豪傑だな、奴は！」って言ったよ。時間遅れて、平気で悠然たる態度、なかなかの大物だよって。
玉虫 それが初出品だったか分からないですけど…
小川 キャンパス巻かないで、電車に乗って来たってね。
玉虫 あの時学生だったから下宿して、多分中央線かなんかで持ってきたんです。
小川 玉虫君の絵でね、僕がこれならちよつと一水会で目立つ存在になるかなって印象に残っているのは、あの緑色に塗った馬がでっかく描いてあるの。
玉虫 ああ…、馬と子供と、なんかそういう異国風な…
小川 緑色の馬！ 動物を緑で描くハシリだな。すぐに賞とったな、当時は賞二回取ると会員になったから、玉虫君も連続でとってすぐに会員になってるね。でもね、後から困ったことは当時十年入選すれば自然と会員になって、それで雪だるま式に増えた。50回展の時、高田誠先生はもうこれ以上はいけないというんでね、あの大改革をやったんだ。

玉虫 あの頃は三段掛けになつていませんでした？
小川 なつてましたよ。三段掛けはもの凄かった。
玉虫 賞を貰って嬉しくて、自分の絵はどこかなあ、まだないのかって見ると上の方にあつて…
小川 僕だってそうですよ。会員推挙の絵なんて二段の上、それでね、僕なんかルツーセ塗ってるから光って見えないんだよ、絵が。会員推挙して札だけは良く見えてるけどね。辛かったねえ、ああいうのは。
だからね、高田先生が大改革やったんですよ。ただ、そのあとショックでね、大勢やめたな。怪文書が飛びかつてもう大変だった。
玉虫 僕なんかのところにも怪文書がきましたよな。
小川 事務所受けて僕がやった事は、高田先生はこうしたかったんじゃないかって、それだけですよ。
玉虫 時代も変わってきてるんですね。
小川 50回展から三十年経つけれどね、昔と比べたら特にここところ視野を拡げてますよな。いつだか審査のとき、吉崎君が立って抗議したことあったじゃない、「イラスト部を設けるなら別だけど、



玉虫 良次 遠い日の風景A 油彩F100号 第45回展

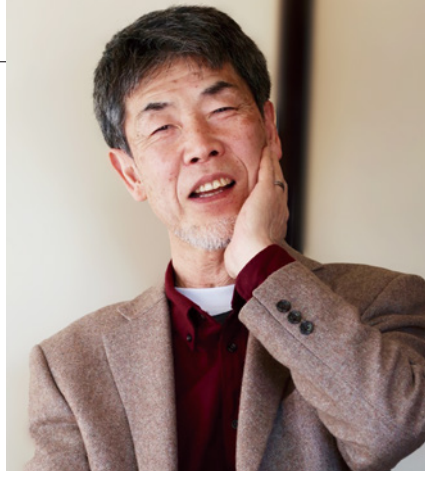
こんな絵入れたら一水会じゃなくなっちゃう！」…だけど、あそこまで拡げて、必ずしもマイナスじゃなかったかなあつて思いますよ。僕も、あの頃はあんな絵は嫌だなあつて思った。今だつてね、正直僕が分かる絵って、エコール・ド・パリまでですもの。それ以降の絵は一生懸命理解しようと思ってるだけでね、疲れるよ。だから確かに今の新しい絵の傾向にむかって、僕は視野を拡げなくちゃいけないなあと思うけど、ついていけない。自分との葛藤がある。僕ら世代はそうだろうと思うよ。
玉虫 何ていうのか、今は絵っていう平面上のことでは無く、美術（ア

ート）っていう分野の中での表現ですからね。自分のいた学校ですが、ムサビ（武蔵野美大）の学生を見ると、やっぱり精神的な部分は変わってないですね。ほんとに愚直に描く奴が半分、迷っているのかあまり学校にこない人もいます。変った奴が多いから結構話が合う。それが一番ほつとした。今年の一月まで、非常勤で何年か行つて一番困ったのはね、若い子たちがインターネットで満足しているのか…自分から探さないですよ。実はその他にいっぱいものがあるのに、そこに手を伸ばさないで終わってる。自分らの頃は目の前になかったから、自分で探さないといけないと見つけられなかった。自分の足で探したっていうのは、今考えると収穫が大きかったなあつて思いましたね。
小川 浦和の画材店に絵の具買いに行つて驚いたよ。今はインターネットで買うんだって。固形の水彩絵の具などバツでは置いてない。「あの色ないの？」って言うと、そんな買い方する人いませんからっていわれた。

対

事務局長
玉虫良次先生

第80回記念



のつて沢山あると思うんです。何年前かに「鴨居玲展」をやったでしょ、あれで初めて知ったという学生がいっぱいいるんですよ、あの鴨居玲をですよ。会に属してもない人の絵なんかどこにも出てこない。

小川 先日ほかの会の集まりに行つたとき、その会の昔の人達の名前出しても若い人たちは知らないんだよ。その会をつくった歴史的な作家の事を全然知らない、それ、一水会でもやっぱりそうかもれないな。

玉虫 ムサビの学生が、森芳雄とか麻生三郎を知らないわけですからね。一水会だったら、安井曾太郎？ 誰っていう人がいて当たり前であつて…

小川 もうね、そういう時代になつて来てると思うね。

玉虫 初出品の頃の話に戻りますけど、自分なんかは、出品して目の前でバアアと実際の展示を見た時の印象は、凄く残ってますね。ああ頑張りたいと思つたんです。でもその時の眼つて確かだつたと思うんですよ、画学生の眼だからね。目の前で見た新鮮さが、一年間頑張ろうっていう何かに繋がるじゃないですか。ネットの画像で満足しないでもつと実物を見た時ウワー！ ってくる感じを経

験してほしいなつて思いますよ。

最近、審査しててみんなの手が挙がる作品が、そういうのと少し離れてきてる。キレイでサラッと、いいんだけど何か欠ける部分があるのではと凄く感じる…例えば、気になる作家の絵肌を真似してみたりするじゃないですか。そんな魅力ある絵肌を目の前で見て欲しいな、学生も、絵を始めたばかりの人もね。

小川 うん、そうだね。さかのぼると、この会

は創立会員の時代、今みたいに裾野が広がる前は、エリート集団だった気がしますよね。それはいい意味ではそうで、その反面自分達だけが本物だ、みたいなところがあったかもしれない。

しかし、果たしてそうか？ その頃はそれによかつたにせよ、もうそういう時代とは違うんだ。いつまでも会是の通りにといいわけにはいかないだろうと思いがら、「二十世紀に於ける選択」を書きましたね。機関紙つてのは凄いですよ。「二十世紀に於け

る選択」を取り上げて皆さんに伝えてくれたことで、各地方でいろんな取り組みが次々と波紋をよんで…だから今、一水会は割と活気ついてきているんじゃない？ いい方向だね。

去年初入選が六十三人だろ。落ちた人までいれば初出品で一水会に挑戦してくれた人はもつと

多いわけだ。

ところで80回展は記念展として取り組むことになってるけど、特別陳列の企画は煮詰まっているかな？

玉虫 今度の80回展の特陳は50回展以降に亡くなられた方達を主に、物故作家の中から決めました。

副題として『一水会80

年の画家たち…その魅力と個性(仮題)』つてのを入れたんです。一水会は親しみやすい写真の団体っていうふうに認識されることが多いんだけど、展示されてる絵にはもつと深いところがあるはずじゃないですか、この会の作家の深みっていうかそこに触れて欲しいなっていうのが大きなねらいですよ。

陳列作品にコメントを付けるんですけど、その作家がどういう魅力があるのかっていう事を伝えるには、作家の身近に居た方のことばから理解してもらうのがいい。それを是非やってみよう。絵を観に来た人が、絵につけたコメントからそれ



を読み取って自分の肥やしにして貰いたいんです。

小川 山田正博さんが藤島奨先生の候補作品の写真送ってきたらう。凄いな！初めて見たなヨーロッパの風景！いい絵だよな、びっくりした。

ああいうのが出るの楽しいなあ。

玉虫 まったくそうですね。今回の特陳は一水会展への出品に限らないで、中品程度のものを多く集めます。観に来るお客さんばかりじゃなくて、実は僕が見たいのもあるんです。

小川 そりゃあ、あるよ。

人選はもう済んでいたかな…

玉虫 はい、十一名ほど。ところで、この企画を通して、自分はこの絵いいなっていう絵を自分の眼で探して欲しいんですよ、もっとね。これから一水会に出品しようという方も、いろんなバラエティのある作品の鑑賞を通して、その作家の生き方も見てもらいたい。ただ巧いっていう、それだけじゃつまらない見方ですよ、巧くなくともいい絵はいっぱいあると思う。一水会の審査やっていると魅力があるのに技巧がちよつと落ちるために入らないことがある…：せつかくチャレンジしてるのに、それを応援出来ない結果になるんで

す。

小川 二点応募のうち一点に絞る時は、今君が言った傾向があるね。賞の選考をする段になると、むしろ落ちてしまった方の絵が個性的というか、魅力があつて困ったりもするよ。

玉虫 審査では会全体のことを考えて、つい無難な方になっちゃう。

小川 こんど審査の前にそういう話を話し合った方がいいかもしれないな。

玉虫 だけど会員の方はもう好きに描いていいんだから、ガンガンやってもいいんですよ。自分はこのテーマでいきたくないの掘り下げていつて欲しい。毎回出せばいいだけだったら、公募展の意味も少なくなってくる。是非、会員の方達に特陳の企画を観てもらつて、これからのことを考えて頂きたいですね。

せつかく皆さんが集まつて、人間的な会でやっているわけだから。僕は、公募展っていうのは、人が集まつてやることに魅力があるんだと思いますよ。この会で皆さん顔を合わせて、自分も元気になるんで、次の励みになるといところ

が抛り所なんじゃないかなと思います。

小川 展覧会っていうのは面白いよね。みんなやめて競いあつてね。陳列うまくやるにはどうしたらいいかとかね。



ることでは、僕としては幅を拡げたいと思う。技術が高くて、一水会展に並ぶ作品全体にわたつて表現の幅が狭いと、だんだん活力が無くなつてしまふ。

小川 でも逆もあるんだよ。審査の時に、これは今までにない傾向でいいなっていうんで、評価していい場所に飾つたら、翌年からは自己模倣になつちやつて感動のない絵を描いてくる。…そういうこともあるから難しいなあ。

玉虫 そういう事を自分で分かるかつていうことですよね、前のよりダメだつて…

小川 そう、そう。

玉虫 自分の良さはなかなか気がつかない。せつかく会に出しているんだから、まわりの仲間に自分の絵の感想を訊いて欲しい。勝手にいい悪いって決めつけしないで、しっかりと伸びていつて欲しいなと思います。

小川 ああ、そうだね。これでこそ一水会という質の展示を目指したいね。

しかしこれからはやつぱり質が大事だ。いろんな視野を拡げるのはいいけれども、最低限の質というものがあるからね、もう少し厳しくてもいいんじゃないかね。

玉虫 一水会展に並ぶ作品の表現の幅を拡げることと、技術を高め

この夏、いよいよ
第1回 山形一水会展
が開かれます。

このたび、尺水会展は新しく『山形一水会展』として発足することになりました。代表の遠藤博政氏は「会員を更に増やしながら、活発な活動を展開していきたい」と、意欲満々です。第1回展は一人約300号ずつ、十五名が展示予定です。この機会にぜひお出かけください。

第1回 山形一水会展

【会期】
7月11日(水)～16日(月)
10時～17時(最終日は16時まで)

【会場】
山形県芸文美術館 2階 第1・第2ギャラリー
山形市七日町1丁目2-39

新たなる展望 第57回一水会選抜展



三月十四日から二十日まで、日本橋三越本店美術特選画廊にて「第57回一水会選抜展」が開催されました。運営委員、常任委員三十七名とその他の選抜者二十七名の10号程度の作品六十四点と小品三十二点。

十七日午後二時からのギャラリートークは、運営委員の斉藤蕙子、池田清明、浅見文紀の三先生が担当。絶妙な言葉の掛け合いでユーモアを交えながら作品を説明し、満員のご来場の皆様には、一時間程の作品紹介を最後まで楽しんで頂きました。

三越新館での打ち上げは、四十三名が出席。初参加の方や遠方より参加の方は、作品制作や一水会での思い出などを披露し、地方展の代表の方々からは今後の活動予定の報告があり、親交を深めました。

(西真里子記)

深沢紅子野の花美術館 盛岡 一水会選抜展

三月二十九日から四月十五日まで深沢紅子野の花美術館で「一水会選抜展」の巡回展が開かれました。盛岡は、春風の吹く暖かな陽気の中で初日を迎えました。

山本勇先生と同行をさせていただきましたが、盛岡駅では廣嶋康子館長、渡邊薫学芸員がお出迎えを下さいました。

美術館の前を流れる中津川は、野鳥が多く、草花が咲き匂い、四季折々の風情を深沢紅子先生が生涯大切にしておられたようです。

展示室は天井が高く、忘れな草のステンドグラスがお洒落な雰囲気を出していました。

オープニングセレモニーは鎌田英樹理事長、山添勝寛副理事長、初代館長の志賀かう子様のご臨席を賜り、また、西真里子先生もお出でになられ、自身の作品についてトークをしてくださいました。

たくさんの皆様方にご来場いただき、盛況のうちは無事終了することが出来ました。「忘れな草の会」の馬場洋子様をはじめスタッフの皆様方の暖かなお心遣いに感謝いたします。

(浅見文紀記)



[特集]

第15回

一水会精鋭展

三月十二日〜十八日東京銀座画廊・美術館にて、開催されました。作品は30号〜50号の八十三点。今年の精鋭展推賞は玉上佑子さんと井上茂文さん。玉上さんは「人間の原点の見える国で人間的な世界を描きたい」、井上さんは「明日香の古墳から出てきた岩の形だけでなくその歴史の表情を捉えたい」と語ってくれました。係は、久保博孝、栗原高光、相馬順子、平井芳夫、保坂晶の各氏。天気にも恵まれ、来場者は一八二名でした。

展評



斉藤蕙子先生

今回は、委員以外の方々が独自の世界観がある、心に残った方々の作品について感想を書かせて頂きます。(アイウエオ順)

1 朝倉 紘一 雨の大通り

都市風景を通して人の日常が描かれて雨の夕暮れの心情が伝わります。透明感を持った、光と影の美しさに足を止めました。

2 池田 賢子 インクフンドの丘

落ち着いた色調の中に生き生きとした光や風を感じます。建

物の色にもう少しバリエーションが欲しい。

3 市川 広美 ヨウシユヤマゴボウ

天性の色彩感や大胆な構図の取り方にいつも感銘を受けます。画面の中心となる所にもっと見せ場を創つても良かったのでは。

4 伊藤 尚尋 明日への記憶

上手いなあと感心するのですが、それを超えて独自の時間が画面に流れ、息づいていると思います。

5 井上 茂文 石舞台

一水会精鋭展推賞

マチエールを駆使して、石に込められた大地や人の時間の経過を心象的に描いています。

6 大倉 美奈子 君が知りたい

ユーモラスで抽象感をもった箇所に魅かれ、独自の感性に期待しています。肌の表現ちよつと邪魔かな。

7 岡山 豊樹 路傍の石

濡れた地面の光と影が美しく、アングルを変えての試みと姿勢を応援したいと思います。空の面積多すぎるかな。



この人に注目⑩
遠藤博政さん



昨年、常任委員に推挙された、遠藤博政さんは山形市で活躍です。(聞き手)木村毅

——画業50年ですか……

一水会展への初入選は、大学二年の時、高校時代の恩師の勧めと真下慶治先生の薫陶を受けて。第28回展です。52年前のことです。大学四年の時、卒業すれば絵が描けないと思い、絵に打ち込み、身体を壊して三年間療養してしまいました。それで、教員としての就職を諦め、会社に勤めてデザインを担当しました。そこで専門的な色彩論を学びました。その会社勤めの間、勿論、一水会展には出品していましたが、ある時、上司からデザインに専念しないかと誘いを受けたのですが、絵を捨てる訳にはいかないと、退職を断りました。そして、高校

8 久保直樹
勇姿

これまでの「送電線」とは違うモチーフでも、興味を持った対象には独自の色調と、こだわりの心情が画面に現れています。花の持つ意味を考えています。

9 久保慶議
残された風景

時間が止まってしまったかのような独特の世界観。大事な何かを置き忘れてしまったような：引き込まれる画面です。

10 児島真澄
静物

小気味良いタッチと色彩でエネルギーや絵に向かう時間の大切さ楽しさが伝わります。控え目だけれど強く、温かい印象に残る良い画面構成だとも思いますが。

11 城真知子
室内

無機質な空間と生命のある物を組み合わせ、独特の空間に仕立て時間がゆつくりと流れている。繊細な心象が伝わってきます。

12 田中久美子
練習

俯瞰した視点の人物像がいつも独特の世界観を創っています。顔の表情をあえて隠す事で、かえって伝わる「その人」が新鮮です。

13 玉上佑子
カスバ回想
一水会精鋭展推賞

動きのある確かなデッサン力で、訪れたことのない私にも「空気感」が自然に伝わってきます。力強い説得力があり、引き込まれます。

14 田村公男
夏の盛り

軽妙なデッサン、筆致で画面に動きと活力があり心地良い生活感を感じる空間になっています。画面左の壁と電柱の入り方が等分過ぎてちよつと勿体無いか。

15 長坂千恵
ひととき

光と陰のコラボレーション。白い壁や石畳の描写が美しい。遠景人物、もう少し生活感のある人でも良かったかと：

16 中村哲泰
とどまることのない生命

厳しい環境におかれても絶やさず繋ぎ受け継がれてきた地球上の生命を、小さな植物や種の姿を借りて構成し、独特の空間となっている。色々考えさせられました。

17 広川明人
道

この若い女性の心の内が伝わってくる様な表情の捉え方が、素

晴らしいと思います。逆光の肌色は、寒色系を取りいれると透明感のある肌の影の色が作れます。

18 保坂晶
石を積む

僅かな隙間から見える空や自然の雄大さが、頑張つて積んだ大きな壁を愚かに見せて面白いです。マチエールの作り方も丁寧で充実しています。

19 松澤泉次
遠い記憶

独特の雰囲気と時間が画面に流れている。家族写真がもう少し小さく、傷んでびび割れていても良かったかな。

20 宮島百合子
石の音色

奥行のある画面に静かな時間が流れ、光と影のコントラストも美しい。小さい号数でも大きく見せる構図の研究を。

21 山崎保
CITY-岩壁(沖縄)

空の赤は人間の犯した誤ちを伝える戦火なのだろうか。力強いマチエールの岩壁に独自性があり、その赤い空に魅かれます。

22 山下審也
春の休日

飾らない、懐かしい静

かな時間と空間に柔らかな春の日差し。それだけでこの充実した画面。モノトーンの中にも温かい豊かな色彩を感じます。白の使い方、配合が本当に上手いと思います。

23 山本佳子
森の道

作品が磨かれ、清潔な空気感が独自のものとなっている。色彩の柔らかな調和は、娘さんへの愛情だと思いました。

24 渡邊道男
豊穣の祈り

空気感のある画面で清々しい。モチーフの組み合わせで、写真でも、ちよつとシニールな新しさを感じます。少女の表情にも魅かれるものがあります。



教員になったものの、なかなか筆が取れない状況に悶々としながら出品は続けました。早期退職後は絵に集中できて、吉崎道治先生のご指導のお陰で今日に至っています。

——モチーフが、街並みから峠道に変わったのは？

街並は、学生時代、函館の異国情緒に感動して描き始めました。街並に住む人々の温かさ、それがテーマになりました。第78回展で初出品から延べ五十一年になったのを機に、「自然」に生かされている私たちに主題を変え、峠道の絵になりました。今年には雑木林の一角を描こうと思っています。

——地元での活動は？

昨年、これまでの「一水会」の名称を「山形一水会」に変え、その代表を務めています。七月には第一回展を開催しますが、まずは良い作品の制作、会員を増やし、東北全体の一水会展出品者増に繋がればと願っています。

.....

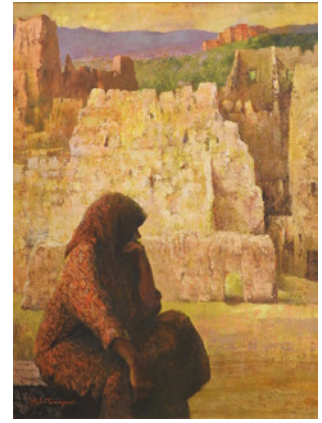
三日後、思いがけないことに遠藤先生から、この面談の要約と、貴重な資料が届きました。聞き手の作業を慮る、そのお人柄に敬服しました。



ヨウシュ ヤマゴボウ 市川 広美



石舞台 井上 茂文 精鋭展推奨



カスバ回想 玉上 佑子 精鋭展推奨



君が知りたい 大倉 美奈子



イングランドの丘 池田 賢子



雨の大通り 朝倉 紘一



静物 児島 真澄



路傍の石 岡山 豊樹



明日への記憶 伊藤 尚尋



室内 城 真知子



勇姿 久保 直樹



残された風景 久保 慶議



道 広川 明人



石を積む 保坂 晶



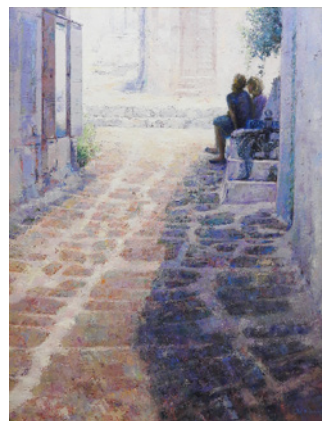
春の休日 山下 審也



Cliff-岩壁(沖縄) 山崎 保



森の道 山本 佳子



ひととき 長坂 千恵



豊穡の祈り 渡邊 道男



夏の盛り 田村 公男



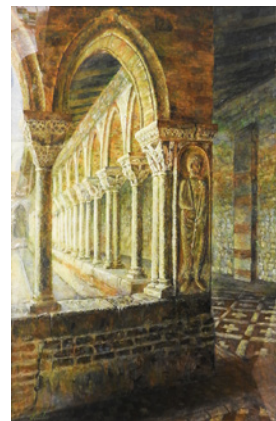
練習 田中 久美子



遠い記憶 松澤 泉次



とどまることのない生命 中村 哲泰



石の音色 宮島 百合子

あのころから

小泉元生先生訪問インタビュー
聞き手／新井・さきや 撮影／加賀利



に親父が建てて他人に貸してた。それでちょうど空いたから鎌倉へ戻って来たの。

—— 絵との出会いは？

小さいときに街の絵描きさんのところへ習いに行ったことがある。その先生は絵描きだけど展覽会には出してなかったね。僕ひとりだけ小学校五年の時に行ったのかな。その時に油絵を一人だけやらしてくれて。

—— どんな絵を、モチーフを描かれたのですか？

その時は静物画だよ。

—— その後小泉先生ご自身も海軍兵学校に入られて、そこでは絵との接点はなかったのですか？

なかったですね、海軍では絵なんて描いてる暇はないよ。

—— 終戦はどちらで？

山口県防府。三田尻っていうところ。最初は長崎の針尾、ハウステンボスが今あるでしょ、あそこに兵学校があつて五千人集まつた、一学年分だけ。そのほかに海兵団があつた。原爆の前に防府に学校ごと移つた。そこで終戦。兵学校が解散して、そこから屋根のない、石炭運ぶ貨物列車に乗つてふた晩かかってここへ帰つてきた。

—— 鎌倉へ。その頃軍人は決死の覚悟というふうなことはあったのでしょうか。

そんなものは無いよ。

—— その後、大学に行かれた。

終戦直後、発疹チフスっていうのが流行つて、みんなやられたんだ。それで入学試験行けなくて、何かのついで明治学院に入れてもらった。そこで二、三年間ぶらぶら。卒業してもなんにもする事がなくなつちやつてねえ、就職つていうこと知らなかつたんだよね、おおらかなんで。

—— 先生は、教師をされることもなく職業は絵描きですね。父上が軍医とのことですら裕福な家系だったのでしょね。

そうですね？ふふふ。それで、同じ教会に女子美を出た人で、中村琢二先生をよく知ってる人がいてね、「小泉さん、絵が好きなら中村先生という方紹介してあげらう。」って。それで連れて行つてくれた時にまず先生は、「両親を連れて来い」って。絵じゃ食えない、生活が出来ないから、まず両親が息子の生活を全部支えることが出来るか確かめるんだ。今と違うよね。それで親父とおふくろが行つて中村先生の許可を得て、それから毎日一人で先生のアトリエで石膏デッサンやつたんだ。半年くらいいたら吉崎君がやつてきて、二人で石膏デッサンして。そばで先生が睨んで。

このアトリエはね、中日新聞の連載小説の挿絵を二本やつて建てた。

—— 連載の期間は？

一年ぐらいでしょね。

—— 大変でしたね、毎日毎日。

新聞社に知ってる人がいてね、それで僕を推薦して。初めに美人

に描いて顔が変わつちやつたりすると叱られちゃうのね、同じ顔じゃなきゃいけないから。吉崎道治君もモデルにしたことがあるよ。それでその時の報酬でこの上に住まいを造つて。母屋には兄貴が居たから、この上で親子四人で住んだよ海軍を。そのあとふるさとの静岡で開業して。この家(神奈川県鎌倉市材木座)は大正時代

—— 先生は広島県呉市のお生まれですね。

親父が海軍の軍医だったからね。呉から江田島へ行つてそれから佐世保へ行つて、そこで辞めたんだよ海軍を。そのあとふるさとの静岡で開業して。この家(神奈川県鎌倉市材木座)は大正時代

—— 先生は広島県呉市のお生まれですね。

親父が海軍の軍医だったからね。呉から江田島へ行つてそれから佐世保へ行つて、そこで辞めたんだよ海軍を。そのあとふるさとの静岡で開業して。この家(神奈川県鎌倉市材木座)は大正時代

—— 先生は広島県呉市のお生まれですね。

親父が海軍の軍医だったからね。呉から江田島へ行つてそれから佐世保へ行つて、そこで辞めたんだよ海軍を。そのあとふるさとの静岡で開業して。この家(神奈川県鎌倉市材木座)は大正時代

—— 先生は広島県呉市のお生まれですね。

親父が海軍の軍医だったからね。呉から江田島へ行つてそれから佐世保へ行つて、そこで辞めたんだよ海軍を。そのあとふるさとの静岡で開業して。この家(神奈川県鎌倉市材木座)は大正時代

—— 先生は広島県呉市のお生まれですね。

親父が海軍の軍医だったからね。呉から江田島へ行つてそれから佐世保へ行つて、そこで辞めたんだよ海軍を。そのあとふるさとの静岡で開業して。この家(神奈川県鎌倉市材木座)は大正時代



「浜」1952年 第14回一水会展(初入選)

して中村先生が教えてくれたんです。

——中村先生の門を叩いたのは小泉先生が二十二歳の時、その二年後にはすでに一水会展に入選されてますね。

——そうでしたかね。

——中村先生はその当時、冬は伊豆にひと月、

また夏は高遠へ。

そんなに行つてたかなあ、高遠は好きでね。竹内徹君がお世話してね。伊豆は安良里に行つてましたよね。

——大広間がある旅館(望仙荘)に一水会の出品者が集まったと伺ってますが。

みんな、巻いて持つて行つて見てもらう。高遠には、岡山の上二巳一家が絵を持つて来ましたね。

——中村先生ご自身、一水会の重鎮として全国を歩かれ、奈良にも毎年行かれて辰巳文二先生も薫陶を受けておられたようですね。琢二先生のごことで何か思い出に残

るようなことがありましたら…。凄く厳しいけど、とつても優しい人だったねえ。先生が居なかつたら僕はこんなにはなつてない。

——吉崎先生のお話では石膏デッサンを直そうとして消すと「消すくらいなら描くなよ」と。一発で決めるというんですね。

——そうですね。口ごたえは絶対にできない。師に対して口ごたえはとんでもないつてね。だから黙つて全部聞かなきゃね。石膏デッサンやつてる頃、不二家の「ミルク」ができたんですよ。それで先生が買ってきてひとつくれたりね、は

つはは。先生が車買ったとき、それじゃあつて僕が運転免許取りに行つて、それで走り回つた。ほとんど僕が運転した。それから有島生馬先生が東京に用事があるときには、中村先生の車に乗せて僕が運転してぐるぐる回つただよ。有島先生は稲村ヶ崎のちよつと先の海辺にいらした。

——これは初入選(14回展)の作品ですか？
僕は気が付かなかつたけど、この絵と同じ場所で中村先生も描いている。おんなじ絵をね、それで初入選。

——番屋がたくさん並んでますね。向こうが江ノ島ですか？
夏の鎌倉の海岸、こんなだった



「ひかげ」1955年 第17回一水会展 一般佳作賞(プルプー賞)

の。だんだん派手になりました。——17回展では受賞されてますね。

これそうじゃないかな、賞もらつたのは。観覧車。
——浜に観覧車があつた。

いろんな遊技場がこの海岸に出来てるんですよ。今はないけどね。夏になるとすごかつた。大体電車で30号くらいは持つて写生に行つたよねえ。だから一水会でプルプー賞もらつた。裕伊之助先生が「これだ」つて言つて選んでくれたつて。裕先生は僕の絵、割合かつてくれていいところへ飾つてくれたね。僕は裕先生にずいぶん可愛がられたなあ。一水会での僕の

賞はみんな裕先生が推してくださつた。
——お話によると裕先生は色彩に厳しい先生とのことですが、小泉先生のトーンを認めていらしたんだと思います。

裕先生は二一スに奥さんがいらしてね、僕はずいぶんお世話になつたんだ、フランスでも。裕先生の弟子で、一水会に野崎利喜男さんつていう人がいたんですよ。それでループルで偶然その野崎さんに逢つたんですよ。僕が最初にパリに行つたとき。

——一九六六年ですね。

秋で、だんだん暗くなるから、「小泉さん、二一スへ行きましよう、いらつし

やいよ僕の知り合いで、裕先生の奥さんがいるから」つて。それで二一スに移つて、裕先生の奥さんの世話でずいぶん絵描いてました。二一ス近郊のカニニユの山の方に裕先生の奥さんのお姉さんの別荘があ

つて、そこを貸してもらってね。

サンポール・ド・ヴァンス。そこで僕はずうっと一ヶ月以上絵を描いた。冬は暖かく快適な所です。フランスの別荘地だからね。裕先生の奥さんはマチスやピカソと仲良しだったんですよ。

——裕先生ご自身マチスの弟子でしたね。

そうそう。マチスと裕先生は電車の中で出会ってね、二スからカンヌに出かけるときに隣にマチスがいて仲良しになってマチスの弟子に。

——一年間の滞仏後、帰国されて大丸で「滞欧作品展」という大きな個展をなさってますね。

「南天子画廊」の世話でね。「南天子」の親父っていうのは中学の僕の先生だったんです、偶然ね。それで南天子がずいぶん僕の絵扱ってくれまして、大丸で個展やったりね。そのころ、田植えをしてるところの絵で一水会優賞を受賞したね。その絵は浜松の時計屋が持つてつちやっつたな。30号に信濃四谷の駅の裏で田植えをしてる田圃を入れて描いてね。

——四谷に田圃があった。

もう一面田圃だよ、建物なんかなくて田圃だった。

——日展にも早くから出されていたようですが途中で辞めた

なりましたね。

日展はね、あんまり中村先生は好きじゃなかったみたいだね。日展に一水会の寺田春式（てらだはるけんしち）という、当時芸大の助教がいてましてね、それが安井門下なんです。寺田さんのお陰で日展に入れてもらったりなんかした。

——それから外国へはフランス中心に頻繁にお出かけになられて取材されてますけど。

フランスへは最初船で行ったんだ。35日かかって。途中フイリピントか：寄りながら。

——フランス語もお達人で、言葉の勉強も続けておられる。

そんなにしないでですよ。困らない程度に。

——車で回られるのですか。

フランスをほとんど全部回ってます。

——以前「ムサシ」で個展されたときには、取材で千キロくらい走られたと。フランスの魅力とはなんですか？

フランスは、街より田舎の風景がきれいだよねえ、どこへ行ってもね。

——自然と建物とが調和している。

そう。

——現場での写生、スケッチを大事にされてますね。

四季歩き回ってますけど大体行くところは決まってるね。寒い時は伊豆へ行つて、あとは信州へ行つたり。

——春先になるともう山が呼んでいますか？

甲州の桃とかね、梨とかね。花を求めてミツバチみたいなものだ。

お茶を飲もう。ケーキ買ってきたから。

：今までで大体一七四〇枚描いてる。番号ふつてある。

——キャンパスの裏にですか？

いや、手帳に。絵の行く先もみんな書いてある。



んな書いてある。

——制作記録ですね、その細かい文字を裸眼でご覧になれるのですか？

眼鏡なんかいらないよ。

——一九八二年に愛川町の公民館正面にガラス絵の壁画を制作されましたね。

ガラス絵っていうのは逆に描くんだよね。それに興味を持って小さいの描いたのかな。平塚に「ふくすけ」っていう小さな画廊みたいなところがある。その親父は僕の湘南高校の下級生で、ガラス絵を描いて展示したら、中学の下級生だった愛川町の町長が、「これ面白から愛川の街を描いてくれ」って言うんでガラス絵描いたんだよ。

——ガラス絵は近岡善次郎先生がお得意で、小品で綺麗な絵を描かれて…。小泉先生の場合は壁画ですから、かなり大きなものですよ。

100号くらい。P

か何かで細長かった。

——絵の具は何を？

普通の油絵の具使ったよ。

——水彩絵の具がたくさんありますが、先生は水彩でのスケッチもされますか？

水彩のスケッチはしない。「大法輪」の表



紙絵と目次絵に使ってる。その仕事は中村先生から回ってきた。吉崎君と二人で毎月、ずいぶん長く続いていますね。

——中村琢二先生に師事された時にはクリスチャンのお友達のご紹介という事でしたが、その頃から信仰生活をされていたのですか？

僕の祖父、おふくろの親父が「熊本バンド」って言って、熊本にクリスチャンの集まりがありまして、その一人なんです。その人たちがみんな京都の同志社へ行って、同志社の第一回生に僕の爺さ

「ヴェズレーの丘」F120 2004年 第66回一水会展 文部科学大臣奨励賞

んがいます。卒業してきて赤坂の霊南坂教会をつくった。「東京名物にしてみせる」って言うってね。本当に東京名物になった立派な教会ですよ、尖塔があつて。

——今は「雪の下教会」の長老で、日曜日には教会へ。制作と信仰生活が重なり合うところは？

全然関係ないね。

——ガラス絵の壁画制作の少しあとにフランスの国際コンクール「アカデミーリュテス」で二年連続受賞されてますね。

一水会会員で甲斐隆という男がいますね。鶴見の中谷龍一さんの一番弟子で、フランスで死んじやつたんですがね、パリで僕はついぶんお世話になった。ル・サロとか色んなのね。中谷さんも、だからフランスへ出した絵はみんな甲斐君の世話でもつて。

——当時はフランスに先生方が大勢おられたんですね。田中義昭先生、小林哲夫先生も滞仏されてましたね。

そうそう。

——小泉先生は一水会に六十五年おられて、その時どきの先生方のことを想い出されると、今の一水会に寂しさをお感じでは？

昔はねえ、小人数だから家庭的だったよねえ。それでみんなが本当に身近なんだよねえ。お弟子さ

んたちが、中谷先生だったり、木下孝則さんの連中と裕伊之助先生とか安井曾太郎先生の連中とかの流れがずうっと残っていた。

だからとつても良かったんですけどねえ。それで師弟関係がすごくあつてね。今そういうものが無くなつちやつたからねえ…。

——普段からお付き合いがあつて。

そうそう。みんな親しかったねえ。木下義謙さんが野球好きで野球チームつくつたりね。僕の若い頃は創立会員がほとんどいましたからね、今と雰囲気まるまる違うの。創立会員が居るっていうのはまるつきりちがうんですね。お正月なんかは全部有島先生のところへ集まつたもん。

——安井先生たちも。

みんな全部。有島先生の家でやつたり、長谷の大仏近くの「華正樓」でやつたり、新年会をね。非常に家族的だったですね。一水会はいま大きくなり過ぎちゃつた。

——そんな印象ですか。

うーん…。そういうものが無くなつちやつてバラバラになつたから…。だから、一水会まとめるといふのは大変だよな。

——画壇全体に若手が少ないんですね、どこでも。

ああ、そうですね。

——今の一水会の出品者に何かお言葉があれば。

今の一水会の人たちは写生が得意なねえ。

——写生が下手だったら写真を穴の開くほど眺めても出てくるものはたかが知れていますよね。吉崎先生とはよく写生旅行もされたと、吉崎先生からエピソードを聞かせて頂きました。

もう、しよつちゅう。いつでも吉崎君と一緒に歩き回つて。

——怪しい宿にも泊まつたと言つても…。

そうそう。

——大体お二人ですか？日本中。他に行く人はいなかったのですか？

いないねえ、はつははは。

——このご婦人の絵はいつ頃の絵ですか。

家内、子供が産まれる前だね。

——結婚されて間もないころの作品ですね。

昔は展示会では海岸を描くことになつてたんだ。

——壁に煙突の痕がありますがストーブですか？

石炭ここで燃やしてたからね。

——ここは静かですね、昔から変わらないんでしょうね…。これからのことで今お考えになつていふことは、おありですか。

ないねえ、ふつふつ、もう歳だねえ。

——これからもずっと写生を？

そう、楽しくねえ、写生ができればいいねえ。車は乗つちやいけないうつて取られちゃつたし、運転免許も警察に取られちゃつた。

——神奈川一水会の若手の先生方と車で行かれると良いですね。

うん。

——白く塗つておられるパレットが何枚もありますが、写真を撮らせて頂けますか？

良いですよ。こつちのパレットも白く塗つてあつたんだよね。白くないと…、油絵っていうのは透明だから。

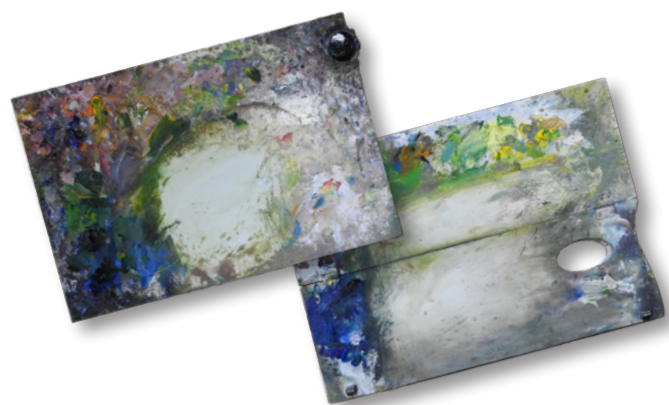
——筆はほとんど豚毛なんですか。

うん、豚毛だけ。

——あの線描の絵は誰が描かれたのですか？

これは孫が描いた。

——巧いですね。この線生き生きしている。特徴が出ていて、ボリュームがあります。お幾つ時



に？

何年生だつたらう？いま中学生だからなあ。

——機関紙の記事にこれだけ載せろということはおありですか？

そんなのないよ。ろくな話もしないで申し訳ない。お役に立つたのですか？

——はい、とても。長時間にわたり貴重なお話を伺えまして、大変に有り難うございます。お邪魔しました。

……

以上「あのころから」
二〇一七年六月十五日
神奈川県鎌倉市材木座
小泉元生先生アトリエにて

自由投稿欄

水路

揮毫 浅見 嘉正

「老人の戯言」

神奈川県・丹羽章

私は大正十四年生まれ、九十三才になります。この年になるまで戦争を含め幾度かの危機を体験しましたが、今日まで生きてこれたことは幸運であったと感謝している毎日です。老人の健康問題が色々取りざたされている昨今、私の経験から気の付いた二、三の健康法について述べさせていただきます。

一、私は小品を手掛ける時も立つて描く習慣にしています。点描という性質上、作品から離れた位置に立ち、全体を眺めながらの制作にならざるを得ず、前後進の繰り返しを余儀なくされます。大作ともなれば、一日三千歩歩いた距離に匹敵することが万歩計からわかりました。これは制作と運動を兼ねて二石二鳥。自然に背筋力が付くので姿勢も良くなります。



写生中の筆者

また、一日の終わりにには体をほぐす目的で木刀の素振り五十回とラジオ体操第一を毎日欠かさず行っています。

二、若い頃は油絵用具一式を背負い、どんなところでも出掛けいき現地で作品を仕上げたものですが、最近は体力が衰え、それも無理になりました。運転免許も返上していますので、軽装にする必要があります。邪道かも知れませんが、私は片手で持てる程度のスケッチブックと色鉛筆を携帯するやり方を採用しています。油絵具の色と同じ色の鉛筆を用意して、いつでも簡単に取り出せるように腰のフォルダ(ベルトに通せる

携帯カメラ用ケースで代用)に差し込んでおきます。

三、常に次回作の構想をイメージして、朝起きた時その日にやるべきことを決めてしまおうと意欲がふつふつと湧いてきます。私は、この「日々を大事に生きる」意欲こそが老化を防ぐ一番の薬であると信じております。

「80回記念展に向けて」

三重県・後藤 邦夫

私は70回記念展に初入選し、それ以来アトリエ風景を描いて来ました。この間、経験の浅い私にとっては、毎回が実験の場となり、試行錯誤で取り組んで来ました。私は絵のモチーフを、自分の参加しているデッサン会の中よりとっており。画家とモデルが緊張と集中から解放された時見せる、様々な姿が、移り変わる四季の風景の様に魅力的に見えるからです。

十年前、田島先生が主宰されていた「四日市素描の会」に参加して6年経った頃、「一水会に出してみないか？」とお声をかけて頂きました。当時私は、年一回の「三重県洋画協会展」を発表の場としていて、一水会の様な大きな

携帯カメラ用ケースで代用)に差し込んでおきます。

三、常に次回作の構想をイメージして、朝起きた時その日にやるべきことを決めてしまおうと意欲がふつふつと湧いてきます。私は、この「日々を大事に生きる」意欲こそが老化を防ぐ一番の薬であると信じております。

展示会への応募となると、それ相当の覚悟のいるものでした。

それから十年、80回記念展に向け、気持ちが高揚するものの、70回展、初入選を越えることが出来るかどうか、一番の気掛かりです。

「千人十色。写実とは己に正直に描くこと?」

東京都・磯村 千夏

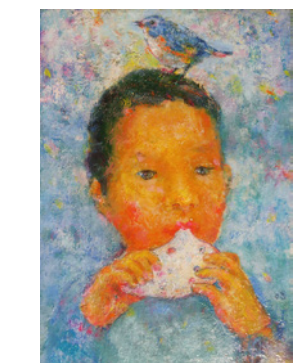
若い頃より好き勝手な絵を描いてきて、気が付けば人生の折り返し地点。縁あって、一水会という歴史ある舞台で発表させて頂ける様になり、記念となる80回展で五度目の出品。

常々自分に正直に絵を描こうとしています。人物を画面に大きく配し、自然と人の交流を表現しています。更には、今この世界に存在している、絵が描ける事の喜び、感謝を表す事が出来れば本望です。

色彩と形のテーマが一度に五感に入ってくる様な、光を放つ様な作品を描きたい。色に関してはついそちらに気が向いて度々溺れています。造形、明暗の追求を東京一水会の研究会で唯今猛勉強中。秋の上野、全国の皆様方の作品をぐるぐると観て廻っていると、各

地方の先生方から励ましやご指導を頂きます。大変有難く、沢山の力作達のエネルギーと相俟つて一水会展は最強パワースポットです!

先人から受け継いだ文化を守ってゆく。訪れる人を笑顔にしたいから。そして自身の成長と心の平安の為、五年後十年後も私は好き勝手に絵を描きます。



磯村 千夏 画

「行く先も知らぬ絵の道かな」

石川県・荒木 幸子

創立のきらめく先達は今の隆盛を想像したであろうか。絵の制作をしていると二十年三十年はまたたく間に過ぎる。それでも八十年ともなると一代や二代では達成できない年数である。一水会金沢展では会の事を知らない友人達も訪れる。「この方々は教科書に載っている」と話すと感服して頷く。そんな時、私ごとが紛れ込んでいてもいいのかと思う。

絵を始めた頃の事、既に活躍中の先輩の女子が「私なんか勘で描いているのよ」と笑わせてくれた。その後数多くの作品に出会い、絵画の奥深さを知り、それを表現する彼等の才能と凄まじい執念には驚嘆させられる。

そんな中で私が長年続けてこられたのは「この次はもう少しいい作品が出来ないものか」「この次こそは…」の繰り返しで今に至っている。そしていつの日か手ごたえのある作品を描き上げたい。スタートの遅い私には八十年は無理だろうが、情熱と絵筆は離さない。

兵庫県・山下 審也

柔道部の顧問をしていた頃の生徒が訪ねて来た。四十歳をこえ大人になった姿の中に中学生のヤンチャな顔が見えかくれする。二人で来たので一杯飲みに行く事にした。なつかしい思い出の花が咲く。とつづくに忘れ去った自分に出会ったり、その頃の子供達の笑顔がよみがえってくる楽しい時間をすごした。彼らは柔道をしていて良かったと話した。

来年で教員生活も終り、望んでいた時間がやってくるのか、何かを失うのか今はわからない。いつ

の間にかその時がやってくるだろう。一水会に出品する様になり、一年が短くなった。

今日は雨がふっている、図工室で、給食室に光が流れていく100号の絵を描いている。日曜日なので静かだ。遠くの運動場で野球をしているらしい、時々バットにボールが当たる音が聞こえてくる。この時間がとても好きだ。時間が流れているのに止まっている様に感じる。いい絵になればいいのと思う。師匠に恵まれ、仲間にも恵まれ、幸せだと思おう。

岡山県・藤原 加奈子

初めて一水会展会場を見たとき、最も印象的だったのは会場に並ぶ作品の色の綺麗さでした。会場に並ぶ作品のように、明るく新鮮味のある色使いができるようになります。…初入選の年に強く思いました。

私はここ数年、小品で透明水彩に取り組んでいます。油彩以上に色の濁りに対して繊細なので、実際のモチーフを観察しながら、その時の色を表現できるように試行しています。

観察しながら描いていると、風景なら光が変わったり、果物なら

傷みも出たりと、どんどん変化してしまいます。写真のようにいつも同じ状態ではないという制限がありますが、実物を見て光や色を感じながら描くという方法は、制作の上で色々と迷ってしまう優柔不断な自分の性格を補填してくれる様な気がします。

第79回一水会展では光栄な事に新人賞を頂くことができました。もっとこうしたい、と思う所は多くありましたが、実感を持って描こうと努めた点を評価していただいたのだと思っています。最初に本展会場で抱いた目標に近づけるよう、今後も励んでいきたいと思っています。

「浦和市高美術部、制作の原点」

埼玉県・池田 竜太郎

高校の美術、最初の授業の日にお会いした先生が、今日までご指導いただき小川游先生でした。整った板書をされ、観点を整理してから実技指導をしてくださり、我々美術部員は授業が楽しみで飛ぶようにして美術室に行つたものでした。学期末の美術部合評会を目指し制作に打ち込む日々、

部室には玉虫先生や平井芳夫先生、白日会の寺久保文宣先輩とい

つた歴代の先輩の作品が掛かり、毎日自作と見比べ、諸先輩に挑むように制作した実に幸せな三年間でした。この浦和市立高校美術部の伝統の中で描いた日々が今なお制作を押し進める原動力となり、絵を描く者としての原点となつております。

一九九一年二十歳の時一水会展に初入選させていただき、以降渡欧期を除く毎年出品、二度の奨励賞を頂戴し二〇〇六年会員に推挙していただきました。一水会で培つたものを展開すべくスペインと英国に合計三回七年間、海外での制作に挑戦。二十七歳、ロペスに憧れ留学したスペインでしたが、ロマネスクの重厚な石の文化に日々接して制作できたことが大きな収穫でした。また二〇一六年まで滞在した英国では、日本でテーマとした緑の絵をイングランドの緑の風景の中でさらに追求し、個展やRoyal Academy展で展示などの成果を得、ギャラリールで同時代の作家と競い合い交流したことは貴重な経験でした。

これまで現場で見て描くことを徹してきたことで、見ることで描くことが繋がってきていると感じています。いよいよ迎える80回記念展、力を尽くし描き切りたいと思います。

群馬県・李志宏

昨春秋、群馬県上野村にある「夢学館・上野村現代美術館」にて開催させていただきました個展には、一九九三年より一水会に出品した私の作品をほとんど展示しました。一水会とともに歩んできた二十五年の間に成長してきた絵の数々を振り返ると、過去の未熟さに反省を覚えることも多々ありました。また、「十日一水五日一石」という入念な作画態度を重んじる一水会の理念を改めて深く心に刻みました。



個展会場

一水会事務局だより

**会員の受賞者は
130号まで
出品できます**

会員佳作賞は、会員の中の数名の方しか受賞できない、一水会展の中でも厳選された作品です。長い間、制作をしながら常に新しい課題を見つけてる姿勢がないと受賞できない賞とも言えます。これまで会員佳作賞を受賞した方は、今年から130号まで発表出来ることになりました。会員の皆様、制作のより新しい方向を見つけることにもなり、会全体の活気を生むことにもなると信じています。尚、今まで通り一水会賞、一水会優賞受賞者は翌年のみ150号まで出品可能です。

**会場に休み場を
設けます**

会場が広くなったことで、見学していただくにも時間がかかり、疲れるとお声がありました。そこで既製品のソファを購入して会場中ほどの二部屋に設置いたします。またご意見などをお聴かせください。

照明を増やします

昨年同様、作品をより鑑賞しやすくするように、照明を追加設置しています。照明を当てる方向も作品ごとに微妙に違うため、一つずつ調整しました。場所によってはまだ暗いので、今年さらに四十灯追加する予定です。

**図録引換券を
ご活用ください**

昨年同様、引換券を使って、図録を一冊お持ち帰りいただけます。知人への図録プレゼント券としてもご活用いただけますので、ご本人が来られない場合も是非お使いください。二冊のうち一冊はご自宅へお送りします。が、会期の後半になってしまつ事をご了承ください。

今年、引換場所を第四棟の入り口に設置し、係が対応いたします。

最近の動静

〔逝去〕越智節昇氏(運営委員)、山川義夫氏(委員)、竹村文男氏(会員)、高橋力平氏(会友)、山崎幸紀氏(会友)
〔退会〕伊藤真人氏(会友)、上田芳子氏(会友)、大塚英一氏(会友)、近江美千代氏(会友)、原田和典氏(会友)、松浦和代氏(会友)、松田博夫氏(会友)

第80回記念 一水会展

東京都美術館

9月20日(木)～10月5日(金)

※休館日 10月1日(月)

授賞式・懇親会/9月23日(日)

ギャラリー・トーク/9月22日(土)・24日(月)

大阪展 2018年11月20日(火)～25日(日)
大阪市立美術館

金沢展 2018年12月12日(水)～16日(日)
金沢21世紀美術館

名古屋展 2019年1月8日(火)～14日(日)
電気文化会館5F 東西ギャラリー・イベントホール

かいしえん 芥子園研究会(大作の研究会)のお知らせ

本年度大作の研究会を左記のとおり実施します。どなたでも参加いただけます。作品持参のうえ、会場へお集まりください。

● 会 場/日展会館一階
第1回 七月二日(日) 九時三十分～十二時・十三時～十六時

● 会 場/日展新会館一階
第2回 九月二十四日(月) 九時三十分～十二時・十三時～十六時

● 搬入出/各自で手配のこと。※日美が便利です。☎03-3811-3854

● 参加費/各回五千円

● ※1回目は構図など下絵で指導します。完成していても構いません。作品は何点でも可。

● ※2回目は完成に近い状態でご持参ください。

● ※出欠席の連絡の必要はありません。

● お問合せ/田辺知治 ☎043-496-1070
栗原高光 ☎045-814-4336

編集後記

オリンピック、パラリンピックには、多くの感動の場面がありました。どんなに困難な事があっても、目標を持って努力する事の大切さ、継続の力、人とのつながり。そして、多くの方の温かいご協力で機関紙は10号を迎えました。あつという間に月日は過ぎますが、参加する喜びを感じています。(M・N)

広報部のお二人と、「この人に注目」の記事を担当しました。現場取材は初仕事です。遠藤先生は、事前に準備をされていた様子で、促すまでもなくお話ししてくださり、こちらの緊張はあつた。私個人旅行で山形の酒田難街道に行くとお話すると、後日、関連記事の載る地元紙を送ってください。何の取材やら。感謝です。(K・T)